

## 研究のまとめ

### 研究の意義

本研究は、人文研究協会「言語学及言語教育の発展」(平成10年度)の助成を受けて、以下の目的を以て行われた。

## Ⅲ 研究のまとめ

本研究は、以上の二つの観点から、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

### 1. 研究の目的

#### (1) 研究の目的

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

本研究は、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。具体的には、言語学及び言語教育の発展を促進することを目的として行われた。

### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 研究の成果

本研究の第1年次研究報告書「学習指導改善調査書の比較検討」（平成5年3月）によると、本研究の目的は次の二つであった。

- 学力の向上を目指す授業改善のための資料を得る。
- 授業改善の方策を提言し、学力向上に資する。

これを基に次の二つの観点から、最終年次の授業改善事例集を中心として成果の一端を述べる。

#### (1) 研究の内容面における成果

##### ア 国語科において

子供の学習意欲を高め主体的な学習活動を保障するために、教材の選択・教材の構成、授業過程、評価と指導方法などを工夫した。

例えば、小学校では子どものよさや可能性を伸ばし、個のよさを表出することができるように、説明文を読む学習の中で、「絵や図表でまとめる学習活動」を取り入れた。

その結果、子供たちは文章の段落の関係を図式化したり楽しいキャラクターの絵を使って表現したりしながら、楽しく意欲的に作品の構造をまとめることができた。

##### イ 算数・数学科において

より一層、問題解決的な授業を実践することに努め、児童生徒一人一人の学習意欲を高めるとともに、数学的な見方考え方を伸ばすことを目指した。

そのために、問題の把握、問題の解決、発展的な考察、の各場面において様々な手だてを講じた。

例えば、中学校の図形の学習で「オープンな問題場面を提示し、生徒の見つけた性質をすべて取り上げる」という手だてを講じた。

その結果、生徒はそれぞれの気づきを表現し、その後の学習意欲を持続させ問題解決に取り組んでいった。

##### ウ 英語科において

中学校では、Top-down reading を中核とした授業実践、高等学校においては生徒に「書き手の気持ちをくみながらインタラクティブに読む力を養成する」ことを目指して授業実践を行った。

特に、高等学校においては上記の力を養成するために、「背景的知識を駆使してストーリーの予測をたてたり、情景を立体的にイメージしたり、登場人物の立場に立って考えたりする」などの手だてを講じた。

その結果、「概要→要点→自己表現」と段階を追うにしたがって本文の内容を理解できた、という生徒の割合が高まっていった。

## (2) 研究の組織や取組面における成果

この研究に関わった協力員（小中高等学校の先生方）は延べ64名、学校数は小中高等学校合わせて61か校、調査協力児童生徒数は約3,100名にのぼる。そして、担当指導主事の実人数は4年間で21名であった。

このような大規模な研究を「プロジェクト研究」として、当教育センターを挙げて取り組んだ。

研究の過程で何度か全体指導の齋藤勉先生から、「小・中・高等学校の先生方が学力向上を目指し一丸となってこのような形で実践的な研究に取り組むのは、日本全国でもめずらしく、貴重な研究だ。」と、激励を受けた。

事実この研究に携わった研究協力員（小・中・高等学校の教諭）から、次のような声があった。

- 「普段の校内における授業研究だけでは、どうしても視野が狭いものになってしまっている。今回のプロジェクト研究に参加させていただき、研究の視野が広がりこれからの課題も明らかになった。」
- 「実際に授業を行って、それを基に研究主題を検討すると、児童生徒をどのように育てていったらよいかがよく分かる。このような共同研究は非常にありがたかった。」

また、県立教育センターの指導主事からも、次のような声があった。

- 「センターや行政機関に勤務していると、どうしても教育現場の情報に疎くなる。このような現場との連携研究は、その意味でも貴重であった。」
- 「中学校教育にずっと携わって来て、指導主事として今ここにいる。したがって、小学校や高等学校の実情や学習内容はほとんど分からないでいた。このような共同研究で他校種、他教科の指導主事と関わることによって、自分の視野も広がり非常に勉強になった。」
- 「学力の向上を目指し授業改善を図ろうとするときに、どうしてもこうあるべきだという理論と現場での具体的な実践が必ずしも一致しないことがある。この研究をやってみて、そのようなギャップを生み出す原因や児童生徒の実態がよく分かった。この成果を、センターでの研修講座にも生かしたい。」

以上のように、このプロジェクト研究は研究協力員にとってもまた、当教育セン

ターの指導主事にとっても、担当教科についての見識を深め、視野を広げる研究となったと言える。

## 2 今後の課題

学力の向上を目指し日々の授業改善を図る場合に、以下の三点に一層心がけたい。

まず第一に、授業実践において「目標・指導・評価の一体化を図る」ことである。現在、「指導と評価の一体化」は、その単元の学習過程において様々な手だてによって、一人一人の児童生徒のよさをよく見とること。授業で実際に学習したことをテストに出し評価の一助とすること等、教育現場に浸透してきている。

今後は、1時間ごとの細切れでなく、その単元全体を通して児童生徒にどのような力を付けるかなどの指導目標を明確にし、その教師の指導観を基にした一本筋の通った学習にしたい。

第二には、児童生徒の主体的な学習意欲を基盤としながら、学習内容の定着と学習方法の体得に配慮した授業を構想し実践したい、ということである。

特に児童生徒の興味関心に力点を置くと、学習内容の定着が弱くなる面がある。また、その逆もある。今後はその間をつなぐ学習方法の体得という面にも力を入れたい。

第三に、本プロジェクト研究での学力の実態調査及び、授業改善の実践的研究の成果を、授業改善の手がかりとして有効に利用していきたい。

この成果を、当教育センターにおける各研修講座で活用することはもちろんであるが第1年次から第3年次まで開催した「学力向上フォーラム」のような形で、学校現場、研究機関、教育行政とが連携をとり一体となった研究・取組を今後も進めていきたい。

最後に、本研究を進めるに当たって御指導いただいた新潟大学教育学部の齋藤勉先生はじめ、国語科の大橋勝男先生、算数・数学科の金子忠雄先生、英語科の米山朝二先生に厚く感謝申し上げます。

また、授業実践に御理解と御協力をいただいた研究協力校の校長先生及び研究協力員の先生方、そして関係機関の各位に感謝申し上げます。

本研究報告書を一読された諸賢から、不十分な点について御指導、御批判をいただければ幸いです。